

## 10月1日 年間第26主日

民 11:25～29 ヤコ 5:1～6 マコ 9:38～48

### 1. マコ

v.41 「はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

「キリストの弟子」という呼称は、共観福音書では使徒たちを指して使われています。彼らは復活の主から、“キリストの死と復活による罪の赦しの福音”を託された人々でありました。ですから私たちは「キリストの弟子」と呼ばれている人々を、キリストの福音の宣教から切り離して理解することは出来ません。原始教会における使徒たちの権威は、その委ねられたキリストの福音の権威に由来するものであって、彼ら自身も人間的には“小さな者の一人(マタ 10:42)”に過ぎませんでした。

間もなく、その使徒たちの宣教を受け入れた人々の中から、福音宣教のための援助者(ロマ 16:2)、協力者(フィリ 2:25)たちが各地に輩出するようになります。そして彼ら自身も、キリストの福音の宣教者になっていきます。使 6-7 章に述べられている殉教者ステファノも、そのような一人でした。このような熱心な信徒の中から、間もなく後の時代の司教に相当する“長老(使 14:23)”や“監督(1 テモ 3:1-7)”が任職されるようになります。

新約聖書が書かれた時代の教会で、任職されているか否かに拘わらず、キリストの福音を宣教する人々はやがて皆、彼らも「キリストの弟子」であるというふうに理解されるようになったと思われます。この場合大切なことは、それが使徒たちから受けたキリストの福音の宣教と固く結びつけて理解されたことです。福音を聞く相手にせよ、それを宣教する自らにせよ、「キリストはその兄弟のために(も)死んでくださったのです」(ロマ 14:15)という福音の「塩味」(v.49-50)を失う「つまずき」(vv.42-47)に決して陥ってはならないと、使徒たちは強く警告しました。

### 2. 民

使徒たちから受けたキリストの福音を宣教することが、ある特定の人々や組織に限定された特権であって、その他の普通の人々には禁止されているかのように、多くのカトリック信者が誤解をしています。このような宗教上の誤解への警告は、旧約聖書の中にも登場します。

v.29 「モーセは彼に言った。“あなたはわたしのためを思ってねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。”」

カトリックという言葉は、異端的な諸集団の発生と戦って生まれた諸信条において、非分派的、正統的な教会の意味に使われていて、それが今日ではローマ教会固有の呼称になっています。過去何世紀もの間、ローマ教会だけが正統的な教会であり、他のキリスト教諸派はそうではないというふうに、多くのカトリック

信者は教えられて来ました。

典礼憲章(8)が、あえて“ローマ教会だけが唯一の正統的な教会である”という表現を避けて、それに代えて“キリストの唯一の教会がローマ教会の内に存在する”と述べたのは、ローマ教会という“この組織の外にも聖化と真理の要素が数多く見出されるが、それらは本来キリストの教会に属するものである”という理解によるものです。この理解は、エキュメニズムに関する教令(3)でも明確に述べられています。

現実に多くのキリスト教諸派が分立して存在していますが、教会の一致は単なる組織上の問題、複数の企業の資本提携や合併などと同じように考えるべきではなくて、イエス・キリストとその福音における一致でなければなりません。その宣教する福音が真に使徒たちから受け継いだ福音であるとき、“キリストの教会は信者の正当なすべての地方的集団の中に真実に存在する”(典礼憲章 25)のです。

教皇ベネディクト 16 世は、かつて 2001 年の論文の中で次のように述べました。「ローマの教会は一つの地方教会であり、普遍(カトリック)教会ではない。それは、普遍的責任を有する特別の地方教会ではあるが、それでもなお地方教会なのである。」「洗礼は……地方教会の一員となるということを遙かに超えた意味を持つ。……洗礼は個々の共同体から起こるわけではない。むしろ洗礼において、一なる教会への扉が私たちに開かれる。」「(信者はどこの教会に行っても)住所変更届を書く必要はない。そこが、同じ一なる教会だからである。」

### 3. ヤコ

私たちの唯一の富は、天に蓄えられています。私たちはキリストの血によって贖われ、罪を赦された“小さな者の一人”であるということ、キリストの死と復活による罪の赦しの福音を宣教する“小さな者の一人”であるということ、そのことがどんなにかけがえもなく大切な宝であるかを、今朝の朗読配分を通して聞くことの出来る人たちは幸いです。

アーメン、ハレルヤ。

## 10月8日 年間第27主日

創 2:18～24 ヘブ 2:9～11 マコ 10:2～16

### 1. マコ

w.7-8 「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

かつて西欧キリスト教社会において、一夫一婦制の尊重と離婚の禁止は、自明の道徳的規範であると考えられていました。1997年にラテン語規範版が公布され、その日本語訳が2002年に発刊された「カトリック教会のカテキズム」では、この伝統の上に立って“離婚は……重大な罪です。……再婚すれば罪はいっそう重くなります”(2384)と教え、さらに“再婚をした者は、……この状態が続く限り、聖体を拝領することが出来ません”(1650)と述べています。

しかし実際には、いつの時代にも離婚と再婚は決して珍しいことではありませんでした。マタイ福音書が「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」という弟子たちの言葉をテキストに挿入しているのは、当時の一般社会の実態の反映であると思われる(マタ 19:10)。

v.15 「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、……」

イエスは子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福されました。私たちも皆昔は子供でした。しかしどんな子供も、皆やがて大人になるのです。

我が国の18歳以上の男女を対象とした信頼できる意識調査によれば、2000年には54.8%、2005年には60.2%の割合の人々が離婚を許容しており、特に近年では結婚期間の長い熟年離婚も急増しています。そして実際の婚姻件数に対する離婚件数の割合は、1995年前後までは25%だったのが、ここ数年は38%で推移しています。これが私たちの現実の姿なのです。

今朝のテキストが、イエスによる御自分の死と復活の予告(8:31, 9:31, 10:33-34)を背景にしていることに注目しましょう。そうすると、使徒パウロの次の言葉は、これらのテキストを解釈する鍵となります。「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。」(ロマ 11:32)

### 2. 創

創世記の第一章には、神が世界と人間を創造された本来の様子が描かれています。それに対して第二章は、人間創造の他の一面を描きました。第一章で“神にかたどって創造された”人間は、第二章では“土から取られて”(2:7, 3:19,23) “生きる者となった”(2:7) “塵に過ぎない”(3:19) 被造物であります。それは、あらゆる知識と意欲と良い選択への可能性と同時に、失敗と過ちの可能性をもった、“肉”に過ぎない存在(6:3)なのです。

「人が一人でいるのは良くない」と言われた神は、男のあばら骨の一部を取って女を創造されました。このようにして、男と女という最も基本的な人間関係は、あらゆる善悪の可能性を避けることの出来ないものとして創造されたのでした。ここでも私たちは、先の使徒パウロの言葉によって、キリストの死と復活の福音がどんなに重大なものであるかを知るのです。「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。」(ロマ 11:32)

### 3. ヘブ

v.9 「(キリストは)神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。」

神の身分でありながら、私たちの罪の深みにまで降りて来てくださった救い主は、信じる私たちを“兄弟”と呼び、“神の子”として新しく生まれさせてくださいました。これがキリストの死と復活の福音です。

聖書は、人が自らの努力と能力によって、キリストの福音による罪の赦しを必要としない程の、義人になることを教えている教科書ではありません。もしそうであるなら、キリストの死は無駄であったことになりま。使徒たちは、すべての人が信じて救われるために、福音を宣教しました。そして歴史の教会は、主の再び来られる日まで、この使徒たちの宣教を継続して行くという課題を受け継いで、今日に至りました。

ですから、私たちも使徒パウロの次の言葉に、心から声を合わせようではありませんか。「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架の他に、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」(ガラ 6:14)

アーメン、ハレルヤ。

## 10月15日 年間第28主日

知 7:7～11    ヘブ 4:12～13    マコ 10:17～30

### 1. マコ

v.17 「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」

マルコ福音書ではこの物語りが、目撃者の生き活きとした記憶に基づいて描かれているという印象を、私たちに与えます。ある人が“走り寄って”“ひざまずいて”尋ねました。イエスは“彼を見つめ”“慈しんで”お答えになります。最後に彼は“気を落として”立ち去りました。

福音書の中の多くの物語りが、ごく初期の頃から、必ずしもその元来の意図が正しく理解されないで、多様に解釈されて来たという事実は、聖書を学ぶ上で興味深いことです。今朝のこのテキストも、しばしば多くの誤解や曲解を伴って不適切に説明されて来たものの一つです。弟子たち自身が当惑した(v.24,v.25)このイエスとの問答の記憶を、しかし後になって福音の宣教の非常に重要な一部として伝えた使徒たちの意図を、私たちは理解する努力をしなければなりません。

先ず第一に、v.19は十戒の後半部分の教えで、それは前半の“神を拝するひたすらな信仰”を前提としていることでした。イエスは別のところで、律法の中心は“神を愛することと隣人を愛すること”であると言っています(12:28-34)。使徒パウロが「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰による」(ロマ3:28)と書いたのは、この物語りの意図するところと同じです。

第二に、この金持ちの男が去った後にイエスは、財産のある者が神の国に入るのは、事実上、不可能であると言われました。どれくらいの財産の額が、金持ちと貧乏人を区別するのかと問うことは、的が外れています。この物語りの最も重要なメッセージは、“人は自らの行為によって救いを獲得出来ないが、神には出来る”ということだからです(v.27)。

“永遠の命を受け継ぐ(v.17)”“神の国に入る(v.23,v.25)”“救われる(v.26)”という三つの表現が、同じことを指しているのは明らかです。そしてこの世では、「キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも」(フィリ:29)受けることを、イエスは予告されました(v.30)。

### 2. ヘブ

v.13 「この神に対して、私たちは自分のことを申し述べねばなりません。」

神のことは、すなわち福音は、私たちが例外なく終末の日に神の裁きの座の前に立つことを明らかにしました(マタ12:36、IIコリ5:10、Iペト4:5 参照)。使徒信条はその第二項で、生きている者と死んだ者を裁くために来られるイエス・キリスト(IIテモ4:1)を信じますと、宣言しています。

しかしそれは、人が善い行いによって、この終末の日の裁きに耐え得る義人になれるということではありません。使徒パウロは述べています。「もし人が律法のおかげで義とされるとすれば、それこそ、キリストの

死は無意味になってしまいます)(ガラ 2:21)、「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです)(ロマ 11:32)。

実にキリストは十字架で、私たちが終末の日に受ける裁きに対して御自身を捧げてくださいました。既に私たちからすべての呪いを取り除いてくださった裁き主が、天から来られる再臨の日を、教会は頭を上げて待ち望んでいるのです。(Iコリ 16:22、フィリ 3:20、ヘブ 9:28、黙 22:20)

### 3. 知

旧約聖書における“知恵”は、主に技術上の知識や処世上の思慮などのことを指していて、ある程度古代近東の世界に共通するものでありました(王上 5:10 参照)。しかし、私たちが今朝注目しなければならないのは、旧約聖書における“知恵”のイスラエ尔的側面です。その典型的な定義は 箴言 1:7 の「主を畏れることは知恵の初め」です。

人間が自ら獲得する“知識”とは対照的に、“知恵(ホクマー)”は神のもとから“訪れる(v.7,v.11)”のことであり、人と共に住んで、人を神の友としてくださるのです(7:14,27-28)。この“神からの知恵の訪れ”と、人間が自力で学習や研究によって獲得する“知識”との違いに注目すると、イエスが「人間に出来ることではないが、神には出来る」と言われた意味が明らかになってきます。今朝の福音書の物語りも、イエスによる御自分の死と復活の予告(マコ 8:31, 9:31, 10:33-34)を背景にして語られているのです。

私たちも使徒ペトロと共に、声を合わせてキリストへの信仰を宣言しましょう。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。)(使 4:12)                      アーメン、ハレルヤ。

## 10月22日 年間第29主日

イザ 53:10～11    ヘブ 4:14～16    マコ 10:35～45

### 1. マコ

v.45 「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

主の“へりくだり”を、謙譲美というキリスト教的道徳の手本として、多くの人々が理解して来ましたが、それは否定出来ない事実ではありますが、聖書が“主のへりくだり”について私たちに伝えている本来の意図とは、ややかけ離れているというのも事実です。

「キリストは、……“へりくだって”、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで(父なる神に)従順でした」(フィリ2:8)。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ3:23-25)

そして、今朝の旧約の日課であるイザ53章は、キリストの十字架の死に至る“へりくだり”を使徒たちが解釈した、最も重要な参照テキストでありました。使徒たちは、信じる人々が「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ1:7)と告白するようになることを期待して、キリストの福音を宣教しました。

「わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラ2:19-20)。「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」(コロ3:3-4)。これこそが、今朝の福音書の日課を通して使徒たちが、現代の教会に伝えようとしていることです。

### 2.

ゼバダイの子であるヤコブとヨハネが、イエスがやがて王となられる日に、その王座の側近として仕えたいと申し出た熱意を、軽率に単なる名誉欲と考えてはなりません。ペトロが「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても……」(マコ14:31)と言ったのと同じ、主への献身と服従の熱意を、弟子たちみんなが持っていました。しかし、“キリストと共に支配する”(IIテモ2:12)という使徒に委ねられた務めは、キリスト御自身の“罪を償う供え物”としての十字架の死に与ることであることを証示するために、この物語りはイエスによる三度目の受難と復活の予告と結びつけて、マタイとマルコの両福音書に納められました。ルカ福音書はこれを最後の晩餐の場面で物語っています(ルカ22:24-30)。

ローマカトリック教会が、この“使徒に委ねられた務め”を、現代の司教団が受け継いでいると理解して

いることは、大切なことです。彼らはキリストと共に、“仕えられるためではなく仕えるために”叙階された人々であります。ですから、司教と司教に従属する司祭はミサの中で、公式祈願と奉献文を唱えるという役割を果たしているのです。しかし残念なことに、もう一つの重要な役割である“信者に神のことは食卓の富を豊かに与える”(典礼憲章 51)のために、福音朗読と説教がふさわしい効果を発揮して来たとは言えないのが実状です。私たちがこれまで聞かされて来たのは、使徒たちが伝えた福音とは殆ど何の関係もない、ただの“よいお話”や“偏向した政治的主張”などでありました。

### 3. ヘブ

「公に言い表している信仰」(v.14)とは、教会が使徒継承によって今日に至るまで受け継いで来たものことです。“信仰”は決して、“主観的な”“個人的な”ものではなくて、“教会の信仰”(教会に平和を願う祈り)であって、それによって私たちは「大胆に恵みの座に近づく」(v.16)ことが出来るのです。

教会はこの使徒的信仰の伝承を、信条や各種儀式書によって、また聖書によって受け継いで来ましたので、現代のキリスト者はだれでも自由にこれを学ぶことが出来ます。使徒たちは聖書の中で、信者が「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために」(v.16)、“教会の信仰”を意欲的に学ぶことを期待しています(エフェ 1:17-18 参照)。各地の司教やそれぞれの小教区の司祭が、必ずしも理想的な有能さを備えていない時代や地方であっても、信者へのこの期待は変わることはないでしょう。

今朝のミサの聖書朗読を通して、天上のキリストは私たちに呼びかけておられます。この 21 世紀の教会に、「今も、恵みによって選ばれた者が残っている」(ロマ 11:5)ことを信じることの出来る人は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。



## 10月29日 年間第30主日

エレ 31:7~9    ヘブ 5:1~6    マコ 10:46~52

### 1. マコ

バルティマイという名の盲人の物乞いが、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだと、この物語りは伝えています。イエスが何をしてほしいのかと言われると、彼は「目が見えるようになりたいのです」と答えました。そして見えるようになって、イエスに従いました。

初代教会の宣教によれば、イエス・キリストは“ダビデの子孫から生まれ”、“神が旧約聖書の中で約束されていた救い主”であります(ロマ 1:2-4 参照)。信仰とはその救いを見ることであり、見えるようになった人はイエスに従うのです(v.52)。

近代の西欧的キリスト教は、世界の人々を多くの困難や抑圧から解放するために、大きな貢献をして来ました。教育、医療、人権と平等……といった分野でキリスト教が果たした役割は、よく知られています。さらに現代のキリスト教の中には、政治的・経済的に抑圧された人々の解放を、教会に与えられた最も重要な課題であると主張する人々がいます。しかし、それらがイエス・キリストの救いとどう結びつくのか、必ずしも明確でないというのも事実です。

見えるようになった。だからイエスに対して恩がある。そうは言っても、人は必ずしもイエスに従って生きるようになるとは限らない。それは各人の自由ではないか……という説明がなされて来ました。冷めた目で観察すると、病気や貧困や抑圧から解放されるまではイエスが必要であるが、もし目的が達成されればイエスの救いの必要性は無くなる……ということなのです。

しかし福音書は、“神が旧約聖書の中で約束されていた福音”を、“ダビデの子孫から生まれたキリスト”を宣教しているのであり、信じて救われるとは、キリストに属する者となってキリストと共に神の国を受け継ぐために、従うことだと主張しています。目が見えるようになることは、約束された神の国の栄光が理解出来るようになることに外なりません(エフェ 1:17-21、コロ 1:5,23 参照)。今朝のテキストが、イエスによる三度目の死と復活の予告と主の受難の物語りの間に配置されていることを、見過ごさないようにしましょう。

### 2. エレ

預言者エレミヤが活動したのは、南王国ユダがその滅亡に向かってまっしぐらに進んで行った時代でありました。職業的預言者たちは、ヤーウェによる救いの神学という正統的教義に固執するのみで、神の裁きの到来という現実に目を閉じていました。エレミヤは迫害され、投獄され、嘆きつつ(エレ 20:7-18 参照)、それでも神の現実から逃れられないで、非合理的な主の言葉を語り続けました。

今朝のテキストであるイスラエルの回復の預言は、当時のエレミヤにとっては「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたこと」(1コリ 2:9)であったことに注目しましょう。旧約の預言者

